
猫又と俺 4

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又と俺 4

【Nコード】

N6109Y

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

おれは普通の高校一年生。何もかも普通だったのに、化け猫妖怪に居つかれたおれは普通ではいられない。

今度の厄介事は保健の先生からもたらされた……。

『猫又と俺』の続編です。

育ち盛り

「あ、あのこれ……」

「はあ」

目がくりつとしたショートカットの女の子が淡いピンクの封筒を差し出した。

今でもラブレターとかあるんだ……。

なんてことを思っぴっくりしたのは初めの頃だけで。今じゃ見るたびに結構うんざりしている自分がいる。

おれは丘野 孝之、私立高校一年のどちらかっていうと地味な男子だ。取り立てて頭が良いわけでもない。良けりゃあ第一志望に受かってたし、ここの特別進学クラスいわゆる特進に進んでいるだろう。

運動も走るの好きだが球技は苦手という痛いやつだ。ルックスは それこそフツーだと思う。こればかりは自分ではあんまり分らない。

ただし、相当やばいなんて自覚したら朝起きれなくなるチキンハートなので「普通」は譲れない。

そんなおれが贅沢にも女子、それも結構可愛い女子からの手紙を見てなぜうんざりしているのかと言えば。

「で、林に渡せって？ それとも田口？ こういうの、自分で渡したほうがいいよ」

おれはため息まじりにその女子の手元を見た。ま、そういうことだ。この手紙はおれ宛てじゃない。それだけじゃなく、今までのすべてがおれ宛てじゃない。

愛想良くなんてできるわけがないだろう。

「だって林君を目の前にすると何にも喋れなくなるんだもん」

涙目になって訴えられておれはたじたととなる。こういうの苦手だ。おれがいつもつるんでる二人、林はスポーツマンタイプのイ

ケメンで、爽やかな外見で明るくて話しも面白い。だが、すごい助平なんだがそんなことは女子は知らない。

片や、田口は「おまえ絶対中一だろ」というくらいのベビーフェイス。色素の薄い髪や瞳の色も相まって、コアなファンがいるらしいこの学校の幼稚舎からいるお坊ちゃまだ。

目立つ二人に挟まれた凡人なおれは、こうやって日々プライドを傷つけられている。

「渡すだけでいいから」

「お、おいっ」

可愛い女子は脱兎のごとく消えて行つた。すげー逃げっぷりに驚く暇も無い。残された可愛い手紙がやけに眩しかった。

「モテモテだな、丘野君」

突つ立つたおれの後ろからかけられた声に、おれは相手が誰か分かつたが、あえて知らんふりした。

「シカトしないで欲しいなあ」

「おれに構わないでくださいよ、笹井先生」

うるせえよ、おまえにモテモテなんて言われたくないんだよっ。
ふざけんよ、この狐つきめ。

まあこの悪態はひっそりと心の中で行われたわけだが……。仕方なくのっそり振り向くと、そこにはこれまたうんざりするよくなイケメンが優雅に腕を組んで立っていた。

養護担当の先生、笹井だ。アイドルばりの容姿だがこいつは狐憑きで性質がすこぶる悪い。

関わり合いたくない相手ナンバーワンなのだ。

「そつ言つなよ、ちよつと手を貸して欲しいことがあるんだけど」
「嫌です」

「まだ言っていないけど、用件」

「い、や、です」

笹井先生の頼みごとなんてろくなもんじゃない。妖怪がらみに決まってる。別におれはそんなことを好きでやってるわけじゃない

い。

危険なことや、面倒なことは断固お断りだ。

第一笹井先生の頼みを聞く義理も無い。こっちがお礼して欲しいくらいだ。この前使役している化け狐が増え過ぎて困ってる先生を結果的に助けてしまったんだから。

それにだいたいこの事はその肩に乗っかってる化け狐にやれせればいい。

横を向いたおれに、ふうんと笹井先生は言いながら肩に乗った狐に何か指図する。すると狐はぴょんと先生の肩から飛び降りてさっきの女子を追い掛けて行く。

「さっきの彼女、急いでたよね。階段とかから落ちなきやいいけど。打ちどころ悪くて骨折とか……どう思う？」

「せんせ、卑怯だぞ」

「たたく、今に始まったことじゃないが、笹井先生は性悪だ。人間の範疇なのが可笑しいくらい妖怪寄りだとおれは思う。はあとおれはため息をついた。

「何すればいいんですか？」

「素直な子は好きだよ」

柔らかない声で笹井先生はそう言うと「黄葉戻れ」と呟く。するとあんなに距離があつたのに黄葉と呼ばれた狐が帰って来た。

「じゃ保健室で話そうか、丘野君」

先生は女子なら失神するやつがいるんじゃないかと思うくらいの笑みを浮かべたが、相手はおれなので別に何もおこらなかつた。

「気色悪い笑い方止めてもらえます？」

「あれ？ これ必殺のやつだったんだけど」

「おれ、男ですけど」

「そうか、丘野には効かないかと先生はくすりと笑つた。つて、今のにヤラレル男子がいるつてのがすごい寒いんですけど？」

保健室の外も中も前は狐がうようよいいたが、今では女子がうようよいる。おれたち、いや笹井先生を見つけた女子がきゃあきゃあ

騒いでる。

「せんせー、どこ行ってたんですかあつ。お昼休み終わっちゃいますって」

黄色い声におれはぎょっとした。

「昼飯まだなのにつ」

くそつ、おれの昼飯。時計を見るともうあと五分くらいしかない。今から学食行ったところで時間切れだ。

嘘だろーっ。気づいてしまってもう腹ペコでおれは動けなくなりそうだった。

「君たち、早くクラスに戻らなきゃ。また、おいで」
にこやかに笑う先生が後ろ手にびしゃんと保健室の戸を閉めた。

ああこういうの、相手がすげー美人の先生だったらエロDVDみたいな展開もあるのに……と心の中でぼやいてみる。

そして……裏切り者は身の内にいた。ぐうぐう遠慮なく鳴るおれのお腹に先生はにんまりと笑う。ほんつとにやなやつだ。

「話し聞いてくれるなら、その引き出しにかぼちのパイが入っているけど」

「かぼちのパイ？」

どうするんだ、おれ。食いもんで釣られるもんかと思う気持ちは、先生が引き出しを開けて皿にのった上手そうなパイを見せびらかした途端に消え失せる。

許せ、おれのプライド。だってまだ育ちざかりなんだ。

「紅茶でいいかな？」

パイを口に詰め込んだまま、うんうんとおれは頷く。
「ある場所にある物を届けに行ってもらいたいんだよ」

なんでそんなにアバウトな説明なんですか、先生。それじゃあ全然説明になってません。嫌な予感しかしないが、突っ込むのは食べてからにしようとおれはパイに齧りついた。

まさか食べ物にプライドを売り渡したつけがくるなんて、善良な高校生には分からなかったんだよ、ちくしょう。

バカバカバカ

カタンと先生が自分のティーカップを皿に戻した。ただそれだけなのに部屋の空気がぐんと変わる。

「じゃ、本題に入りますか」

「ほ、本題？」

「惚けたってダメですよ、丘野君。ここにパイ食べに来たわけじゃないでしょう？」

ソファから立ち上がるうとしたおれは先生に肩を押えられて再びソファに沈んだ。

「ただいま」

「おう、帰ったか孝之」

家に帰ったおれの足に黒猫が纏わりつく。尻尾が二つあるこの猫、実はただの猫じゃない。尻尾が二つあるこの

人語を喋ってる時点で普通じゃないんだが、こいつは妖怪なのだ。化け猫妖怪、猫又という。

「なんだ、暗い顔して。腹でも痛いのか」

「別に……」

猫又相手に言い合いする気にもならず、おれは自分の部屋に入っ

た。

「別につてなんだよ、ああ？」

いつものやくざばりの声を振り切り、ドアを閉めたはずのおれの

部屋のベッドの上に、猫又がいるのを見ておれはがっくりと頂垂れた。

何でいるんだよっ。

人間だれしも一人になりたい時つてあるよな。今、まさにそうなんだよ。思春期の難しいお年頃つてやつだ。そういつ香り、ぶんぶん漂わせてただろ。

そこは気を利かせるとこじゃないのかよ。思うが猫妖怪に相手の気持ちを慮おもんばかれつていつても無理か。

他人同士の共同生活なんてどつちかが我慢ばかりだと上手くいかない。たかられてるばかりのこの生活が共同生活と言えるだろうかとちらりと思う。

が、今後の事もあるし、ここははつきり言おう。

「今ちよつと話しをしたくないんだけど」

言った途端に顔面めがけて猫又の蹴りが飛んで来た。

「わ、わ、分かった。分かったから……ちよつと落ち着こうか」
ベッド横の床に倒れているおれの胸に乗りかかり、前足の爪をによつきり出している猫又に向かつておれはマジで焦っていた。

いつでも手を抜かない。ネズミを相手にする時もゾウを相手にするときも全力でやる、そう公言しているこいつの攻撃は半端無い。だけど学校での話をしたらもつと猫又の機嫌を損ねる気がしないでもない。

「孝之っ」

「わ、分かった。言うからそんな物騒なもん、しまつて」

おれの躊躇も迫る脅威にすぐに翻る。所詮、おれはヘタレだ、悪いかつ。

「笹井先生におつかい頼まれたんだ」

「おつかいだと？」

「う、うん」

間違いじゃ無い、頼まれたのはおつかいなんだから。

「じゃ、そのおつかいの内容を聞こうじゃないか」

「やっぱり聞く？」

言った途端に「シャアツ」と猫又が威嚇の声を上げて、おれは速攻で今日の出来事を喋っていた。

「つまり、おまえは大木の根元にあった祠の中から持っていった鏡を返して来いと言われたんだな」

「……うん」

猫又はハアと大袈裟にため息をついて見せた。猫にため息をつかれるおれって。

「場所は神社だろ」

「……そうだけど」

おれの返事に猫又の口が『バカバカバカ』と言っている。声は出ていないがそれはしっかり分かってしまった。猫の言いたいことが分るおれ。でも全然嬉しく無い。

「その大木つてのは杉か樺。いずれにしてもご神木だな。それは御霊代、または依り代とも言われている神だ。そこに収まっている鏡つていやあ……」

ああと猫又はおれの体から飛び降りた。

「魔を避けるために埋められていたその魔鏡を使ってあのくそ狐憑きが何をやったのか知らんが、孝之おまえ簡単に返してくりゃいいとでも思ってるのか？」

神社に忍び込んで鏡を元に戻す。面倒くさいことだが今晚にも行つてこようと思つていたのに、猫又の言葉にどんどんやりたくなくなってくる。

「えと、それって危険かな」

「バカ野郎、死ぬぞ」

死ぬ……んですか。カボチャで一つで自分の命を差し出したおれ。うっそ、冗談だろ？

「鏡で魔を跳ねのけていたくらい力が集まり易い場所だったところだぞ。鏡がどれだけ無かったのかは知らんが俺さまならそんなところには絶対寄りつかん」

「か、神さまなんだから……人に危害なんて」

言った途端にまた猫又が『バカバカバカバカ』と口を動かす。

ああ、もうこんなこと分かりたくない。

「ここで言う神は仏教とかキリスト教とかそういうものの神とはまったく別のものだ。この国は昔から自分たちの力の及ばない物を『神』として祀ってきた。当然、慈悲深いなんてことはない」

猫又が目をきゆうと細くした。

「孝之、荒ぶる神って知ってるか？」

「あ、あらぶる……」

とんでもないことに巻きこまれてしまったとおれはそのまま頭を床に打ち付けた。

殺傷石

「し、死んじゃう?」

「ご愁傷様」

ここは慰めるために嘘つけよ。正直者なんて大嫌いだつ。

「おい、寝てる場合じゃないだろ」

柔らかい肉球がふにっとおれの顔を踏む。確かにそうなんだけど、死ぬとか言われてやる気になれというほうが無理だろ。

こつなつたらやりたいことをやり尽くし、旨いもん食いまくって死にたい。そして辞世の句はこうだ。

「気をつける、暗い夜道とカボチャパイ」

つい口をついた言葉に猫又の大袈裟なため息が聞こえた。

「辞世の句のつもりか、孝之。それはな、標語だ。やっぱりおまえは底なしのバカだな。いいからパソコンを立ち上げる。神社を調べらんだ」

猫又の言葉におれは驚いた。だって妖怪とパソコンってなんか合わない。

「猫又つてパソコン知ってるの? って、痛えっ」

飛び上がっておれの頭を足がかりにした猫又は、さっさと机の上に行くとおれを見下ろした。

「俺さまをバカにするなよ。パソコンくらい知ってる」

へええ、最近の妖怪って結構ハイテクなんだ。スマホとか操ってたら笑えるよな。そんなことを考えていたらシャーペンの芯が手の甲に刺さった。

「うわあああああつ?」

「余裕あるじゃないか、ニタニタ笑いやがつて」

「しゃ、シャーペン……えええ?」

尻尾でシャーペンを器用に巻きつけているのはいいが使い方が違うと言いたい。たかがシャーペンの芯とはいえ、手の甲にめり込

むと切ないほど痛い。

「痛いんだぞ」

「知ってる」

そーかよ。

いててと言いながらパソコンを立ち上げると、好きなゲームのキャラクターの三頭身イラストが画面に現れた。

へっという猫又の声を聞いたような気がするがもう無視するしかない。

「堅州国神社……ってここだ。あつたよ」

小さい神社らしく地図に印しかない。遠くだとやだなあと思っていたが案外近い。これなら自転車で三十分くらいで行けそうだ。中学生や、高校生男子にとって足と言えは自転車だ。二時間以内なら自転車の行動範囲内といえる。

だが、ほっとした俺をよそに、名前を聞いた猫又の様子は違った。

「堅州国って言ったよな」

うつむと机に置いてあるパソコンの前で佇む猫……不思議な絵面だ。

「堅州国かたすくにってのは根の堅州国からきてる。それは黄泉のことだ。そして神木の根元の小さなお祠の中にあるのはおそらく殺傷石だ」

「さっしようにせき？」

「ああ……その力を封じ込める目的でその鏡を上うへに置いていたのかもな」

それで？

そういった顔をおれは猫又に見せていたのだろう。無言のおれに猫又は呆れたような仕草を見せた。

「今の聞こえてたか、孝之」

「聞こえてたけど、さっしようにせきの意味分かんねえ」

「そーか」

猫又がごろんと横になった。尻尾がふりふりと揺れている。もしかしてもうどうでもいいやとか思ったのか？

「なあ、教えてくれないの？」

「知ってどうする？　ますます行きたくなくなるぞ」

猫又に言われておれは椅子にがたと座り込んだ。頭をわしゃわしゃかき混ぜてみたりしたけど何か良い案がぼつと浮ぶ。なんて事は無かった。あるはずない、そんなことできるんなら定期テストで毎回悩まない。

「あんたって子は、返ってきたテストを親に見せる前に何で今回の敗因は、とか言うのよっ」

予防線張ったつもりが、張ってることで怒られてしまった……って、今何考えていたんだっけ？

ああ……鏡だったよな。

行きたくない。行かなくていい？　だってあの女子を知っているわけじゃないし。酷い事っていったって、まさか死ぬなんてことはないだろう？　笹井先生だって人殺しまではしないよな。だったらおればっかかり命かけるのってどうなんだ？　知らんふりしたっていいだろ。

「ああああっ、おれってなんてひとでなしなんだあっ」

叫んだところでどうにもなりはしない。そんな事分かってるけど叫ばずにはいられなかった。

だってやっぱり怖いじゃないか。笹井先生が誰かに行かせようとしたのはこういうことだったのか。単なるおつかいだと思ってたおれは猫又の言う通り、本当にバカだ。

それでも自分の身を守るために他人を見殺しにする冷徹さもおれには無い。どっちにも行けず、その場でおろおろしているだけ。

項垂れるおれの横で猫又が何か言った。

「……ってことだよな」

「は？　何？」

転がっていた猫又が勢いよく起き上がる。

「この殺傷石は妖怪のなれの果てだ。ってことはだ。鏡の無い今、そいつは人に害を与えている」

「ま、まあ……」

あんなちっぽけな神社にそうそう人は行かないだろうけど、近づけば何かと障りがあるのは間違いないだろう。

「よっ」と声を上げた猫又が机の上から綺麗な弧を描いて飛び降りた。で、やけに楽しそうな声が部屋に響く。

「って、ことは……この美少女妖怪、猫又さまに任せろ」

猫又はいない

やっぱ、それですか……。

「石、やつつけるのかよ？」

「もちろん」

そこには、目付きの鋭い花柄のワンピース姿バージョンの猫妖怪が腰に手を当てる大きく足を開いて立っている。

「そんな曰くつきの妖怪を退治してみる。どんだけ徳を積めると思うんだ。ここは俺さまが、その石に隠れてやがる妖怪をぶつ殺してやる」

猫又がやる気になったのって、そこ？

ふんつと大きく息を鼻から出した猫又に若干がっかりしたおれだった。いや、純粹におれを助けたいと思って……とは思わなかったけどさ、ここは少し嘘でもいいからそんな事を言っただけ欲しかった。「おい、何たそがれてるんだ、孝之。あの狐憑きから預かった物を持って来い」

「うん」

預かった文箱は漆塗りで思ったより軽い。上の箱との境に札が貼ってあった。これを剥がせばいいのか？

「孝之、止め……」

びりつと破った途端に勝手に上の箱が飛んで白っぽい光が目を見た。

「うわああっ」

あまりの痛さに暫く目が開けられない。

目を怪我した？ ときどきしながら薄目を開けるとちかちかはするが何ともなっていない。思わず胸を押えて猫又はどうなったのかと探すが猫又の姿はどこにも無かった。六畳の部屋だ、そんなに死角があるはずも無い。

「猫又？ どこ？」

椅子の下やベッドの上、クローゼットの中。　ともかくどこにも猫又はいない。

「なんなんだよ。俺さまに任せろなんて言ったくせに」

何が何だか分からないまま、おれは一人になってしまった。　がつくりとその場に座り込んで、何の気なしに箱に収まっている鏡を取り上げてみる。

燻された鈍い光を放つ銀色の手鏡。　おそらくそんなに古いものじゃない。　それにどんな力があるのかおれには分からなかった。　だって、

だって教えてくれるはずの猫又がいない。

「おれ一人で行けっというのかよ」

おれの文句に誰の答えもツツコミもない。　一人になったと思いき知らされて一人ひっそりと落ち込んだ。

それでもおれは、

おれは行かなきゃ。

ため息を何回もついた。　そこら中壁や椅子やドアを蹴って、大声を上げまくった。　そんなことしたって何も変わらない。　知っているけど止まらなかった。　ひっくり返った部屋を眺めておれは納得したかったんだと思う。

どこかでいつも猫又をあてにしていた。　助けてもらえること前提で。　今回のことだってバックボーンに猫又がいるから受けたよ。　うなもんだ。

後ろだて　そんなもん、あつという間に無くなるんだ、今みたいに。

「行くか」

鏡をおれは斜め掛けした鞆の中に押し込み、自転車の鍵を引き出しから取り出した。　懐中電灯を探し当ててカーゴパンツのポケットに突っ込んだ。

めちゃくちや行きたくないけど。　誰かが止めていいと言ってくれたら速攻止める。　そんな思いで……それでもおれは家を出た。

携帯に入れた地図を頼りに自転車を漕ぐとあつと言う間に神社に着く。こんな近くに近くにあるのにおれはまったく知らなかった。

まあ、目の前にあったとしても見えて無かったかも。それほどおれには縁遠い場所だった。鎮守の森と言えば聞こえはいいが、なんだかただの造成途中でほったらかしになっているだけみたいな雑木林が続く。

脇に自転車を立て懸けて上着のポケットを探る。懐中電灯を取り出してスイッチを入れると、そこだけ丸く切り取ったかのように明るくなった。小さい神社だと思っていたが歩いていくと結構奥深い。足元の石が歩きたびに大きな音を立てて、ここに侵入者がいると教えているようだった。

ざくざく……ざくざく……もうどう足を動かしても音が鳴る。
「くそっ」

もうやけくそ気味におれは走った。足元の石が弾け飛んで木の幹に当たって落ちる。急に走ったせいかなんだか気持ちが悪くなってきたおれは立ち止って胸を押えた。

おれってどこまでもヒーローになれないやつだ。現場に行く前に疲れ果てるってどれだけ運動不足なんだよ。

「き、気持ちわる……」

膝に手を置いて顔を上げると、何かがおかしいことに気づく。

今日は満月だ。周りに照明がまったくなくとはいえ、こんなに墨を溶かしたみたいに都会の夜が何も見えないっておかしくないか？ 真っ暗という言葉の次に来るような闇に見覚えがある。

漆黒の闇　　去年の夏、確かにおれは同じ闇の中にいた。思い出したら腕からゾワリと寒気がうなじへそれ自体が生きもののように這い上がってくる。

似ている。闇の気質……そんなものがあるとしたら、これこそがそうだ。明らかに悪意を含んでいる暗闇。

お母さんの教え

「だいぶ大きく膨らんだようだな」

「ぎえええっ？」

後ろから急に声をかけられておれは飛び上がった。 いるよな、こんなやつ。 怖い話をしてるときにビビらそうとして急に大声を出すやつ。

そして、まんまと俺はビビったよ、マジで。

「猫又っ」

怖かったやら、今までどこ行ってたんだとか。 言いたいことが互いに優先順位を争って、もうおれの頭はぐちゃぐちゃだ。

嬉しいんだかむかついてるんだか……きつと両方だ。

「おまえなあっ」

そう言っただけ振り返ったおれに、ガコンと猫又のげんこつが頭に入る。 今の猫又は人型でお馴染の目付きの鋭い女子姿だ。

な、なんで？

「でかい声出すんじゃない。 おまえどんだけ場数を踏んでも学習しないんだな。 そんなんだから『すべりどめ』に行くんだよ」

「うっ……」

再会に内心嬉しかったおれの笑顔も凍る言葉をさらっと猫又は言い放った。 こっちはいなくなってしまうとどんなに心配したか。

文句の一つも言っただけと再び口を開く前に猫又がおれの鞆をバンと叩いた。

「あの物騒なもんはまだ鞆の中にしまっておけよ。 不用意に出すもんだから相当飛ばされたじゃないか、このバカ」

「お、おれ？」

「そーだよ、おまえだ、孝之。 帰ってくるのに往生したぜ」
憎々しげにそう言つとふんと猫又は鼻を鳴らす。

「ご、ごめん。 で、どこまで飛んでったの？」

隣町？ まさか違う県とかじゃないよな。 でもこんなに怒ってるんだから……いや、ちよつと待て。 猫又つていつもこんなスタンスだよな、騙されるなおれ。 逡巡するおれの口の端をぎゅむつと捻りあげて猫又が答えた。

「ちつ、地獄の釜近くまで飛ばされたんだよ。煮えたぎる血に落ちるかと思っただけだからな」

なぬ〜っ？

「ほ、ほんと？」

「嘘ついてどうするんだよ、ああ？」

いやもう、なんでこんなに凄味があるのか分らないし、どうやってたらそんなとこまで飛ぶのかも謎なんだが、相当ヤバかったらしいのは分かる。

「俺さまは成仏して極楽に行きたいんだ。なんで地獄に行かないやなんないんだよっ」

「いや、それはやつぱり神様は良く見てるから……」

言わなきゃいいのについて言ってしまうおれは真正のバカだ。 妖

怪殺しまくってる猫又が極楽に行けるわけなんて無いんじゃないか。

「つーか、極楽って本当にあるの？ そう思ってしまったのがつい、口に出てしまったのだ。」

「ぐわああああっ」

肉食獣の咆哮のような声が聞こえ、殴りかかって来た猫又の手がおれの頭上で止まる。

助かったと一瞬思ったが、危機は去ったんじゃないかと別口になっただけだと即座に気づいた。 いや、もっと悪い。

「何今の？」

「殺生石に閉じ込められていた何かが本格的に目を覚ましたのかもな」

あっさりと猫又が応えて声ができる方を見据えた。 見るからに嬉しそうな顔で、きつと猫姿だったら毛が興奮で逆立っていると思う。「行くぞ、孝之」

「あ、うん」

横目で見た猫又の舌がぺろりと自分の上唇を舐める。

「た、楽しんでないだろうな」

「バカ野郎、楽しいわけないだろ」

猫又はそう言うけど、スカートから飛び出した二本の尻尾がふるふると揺れているから思っていることなんかダダ洩れだ。

すっげー楽しいんじゃないかよつ。

「これって悪霊かな？」

去年の夏に見た　　そう言おうとしておれは言葉を飲み込んだ。

その悪霊が猫又の元飼い主で、そいつのせいで猫又が妖怪になった……　　と思い出したから。

悪霊と成果てた飼い主を猫又は優しい人だったと　　そう言っていた。　　簡単に割り切れるわけではない、そう思うと口にできない。

口ごもるおれにふんと猫又は鼻を鳴らし、二、三度大きく頭を振った。　　おまけに足元の石を蹴とばした後、不貞腐れ気味に口を開いた。

「そうだ、おれさまの飼い主と同じ腐った悪霊だ」

「え？」

「そう言っただけじゃなかったんだ。　　なんで俺さまがおまえの気持ちを斟酌しなきゃならないんだ」

苛々すると猫又は大きく舌打ちをした。

「なあ、猫又……ごめ……」

「うるさいっ」

おれの言葉は猫又の声と実力行使によって遮られた。　　どすんと

鳩尾に一発くらっておれは膝が折れて蹲る。

「……いつてえ……なにすんだよ」

「それ以上、気色の悪いこと言っただよってというお願いだ」

お願いだと？

猫又め、お願いするときには手を出さなっってお母さんに教わらなかつたのかよ。

ねばねばの正体

「うわああっ」

黒いねばねばした触手がおれの足に絡んできたのだ。急いで払い除けると手にぬめつとしたものがべったりとついた。

「ぎゃあ、気色悪っ、来るな、来るなっ」

腐りかけた蜘蛛の巣みたいなの……もちろん、蜘蛛の巣が腐らないことくらい知ってるけど。例えばそんな感じのねばねばだ。

「く、蜘蛛みたいだよな」

「蜘蛛？ どつちかっていうと触手は蛸っていう……いや、蜘蛛か。そうかもしれん」

猫又は顎に手をやってふんふんと考え込んでいる。その間にも黒っぽい触手があちこちから伸びて来ておれたちは触手の群れに囲まれていた。

「ど、どうするんだよ。囲まれちゃったじゃないか」

別に猫又のせいじゃないんだけど、誰かにおっ被せてしまわないと泣きだしそうだ。

「この触手を操ってる本体をやっつければいいんだ。俺さまの前に出る、孝之」

腕を掴まれたおれは猫又に押し出されるように前に行かされる。

何で？ おれを生贄にしてその際に本体を狙う作戦？ って、おれに一言の相談も了解もないってさ………そんなの。

「やだっ、猫又がそれで妖しをやっつけられるとしたって、おれが犠牲になるのなんか納得できないっ」

別に一人無事で行きたいなんて思ってるわけじゃない。一緒に立ち向かうならやられてもいいんだ。でもこんなの………そう思っておれは猫又の後ろ側に回ろうとした。

「動くな、ボケ」

「いてっ」

途端に猫又の蹴りが横腹に決まる。

「何訳の分らんことぐだくだ言ってるんだ。早く鞆から鏡出してやつらに向ける、バカ」

あ、そういうこと？

鏡は妖しに効く。だから、猫又はおれの後ろに回らないといけないのだ。言われて気づいておれは頭をがりがり搔いた。

「鏡のことすっかり忘れてた」

「おまえ……ここに一体何しに来たんだ？
うっうっ、ごもつとも。」

鞆を手探りで探す。目を逸らすなんてとても怖くてできない。

大きくもない鞆の中に確かに鏡はあるはずなのに手に触れるのは懐中電灯とか、ハンカチにテッシュやらお財布とか。お育ちが良いのが丸分りだ。くそっ、なんだって定期なんて持って来たのかと自分に腹が立つ。

「早くしろっ、孝之」

後ろから罵声が飛ぶが、こっちだって早く出したいに決まってる。焦ってる時に高圧的にされるともつと焦るって知ってるんだらうか？

足元から這い上ってくるゼリー状のものがもう気持ち悪くて堪らない。顔にべちゃっと覆い被さるように触手がへばりついてきた頃ようやく硬い手触りとおれは巡り合えた。

会いたかったよ、ベイビー。

「これでも喰らえっ」

鞆から出して両手で突き出すように構える。と、ぐわんと空間が歪むような感覚と共に白く眩しい光が目を焼いた。

そうだった、これって痛いんだった。火を当てられた蛭のようにじゅっという音させてぼとぼと腕や足から触手が落ちていく。

最後に顔を覆っていたためぬるもべたりと地面に堕ちて崩れる。

おれたちを囲んでいた円がぞぞぞつと広がった。

「こ、これってさ」

な、なんかおれ……いけるんじゃない？

この鏡さえ持つていけばこいつらを恐れる理由などない。　って
いうか、妖しには無敵ってことじゃないの？

おれって無敵なんだ。

こんな気分の良いことが最近あっただろうか？　生まれてこのか
た、こんなにおれがヒーローだったことなんて一回も。　猫又だっ
ておれを頼ってるじゃん。

誰かおれのこと見て無いか。　林とか、田口とか。

「って、なに言ってるんだ、おれ。見られるなんてマジNGに決ま
ってるじゃん」

これから始まるおれの活躍は人知れず行われる……んだよな、う
ん。　俺の善行はきつと神様が見ている……よね？

「このまま突っ走るぞ。ついて来いよ、猫又」

おれの後ろで「ちっ」という音が聞こえてきたがおれは寛大にも
聞こえないふりをしてやった。　自信がつくと余裕が生まれる、そ
ういうことだ。

おバカにも自分が強くなったと思っ込んでしまった。　まあ、今
までそんな経験が無いんだからしょうがない　　っていうのも後で
思っことだ。

「うおおおおりゃああ」

手鏡をかざしながら爆走する男子高校生。　一般の人が見ちゃっ
たらかなりヤバイが、ここはさらっと流して欲しい。　だって今は
妖怪相手という非常時だ。

下がって行く触手のスピードを超えておれは闇の中に突っ込んで
いった。

神様だって何だって

ぐにやり……。小学生の時に理科の実験で作ったスライム。その中に飛び込んだみたいなお手ごたえがあるような無いような心もとない感触。

ぬめっただか、どろっただかしたものが身体に当たったと思うと煙を上げて消える。それは面白いほど。だが、消える時には恐ろしいほどの悪臭が辺りに漂って吐きそうになる。

これはやばい。

「お、おげ……」

匂いに弱いおれには過酷すぎる。ちょっと鏡を伏せたくなるほどの匂いにおれの足が完全に止まり、後ろから続いていた猫又が勢いよくおれの背中にぶち当たってきた。

「こらっ、何やってる、孝之。休むのは後にしろ」

「休んでるわけじゃ……おえっ……だって臭いじゃん」

言った途端に尻に蹴りが入った。いつもの事とはいえ、よくもそんなに潔く蹴れるなど言うくらい痛い。もしかして敵と味方に力の入り具合の違いなんて無いんじゃないのか？ 思わずそう思うが、本当にそうだったら立ち直れないので聞けない。

「痛えっ」

「ここで立ち止まって、こいつらの餌になるのか？ そんで自分がこの糞みたいな匂いになっちゃうってか？ 自分が糞なら匂いなんて気にならないよな。木は森に隠し、糞は糞の中に隠す……ってな背後から女の子にはあるまじき言葉が連発される。まったくどんな羨をされたんだ……文句を言いそうになって、俺は思い出した。生前の猫又の飼い主は猟奇殺人者だったんだ……もう羨以前に問題のあるやつ。」

怨念の混じった血を浴びて猫又は妖怪になったんだ。可哀そうなやつだよな、実際。だけどさ。

それにしたって。

糞、糞言い過ぎだ、くそっ。

「うるさい、ちょっと休んだだけだったの」

怒りつつ結構パワーがあるもんだ。絶対無理だと思っていたのに、かつかしているおれの鼻は匂いをあまり感じなくなる。勢い良く立ち上がったおれは、ただひたすらご神木に向けて再び走り出した。

ぶわんと羽根布団みたいな感触の空気の壁を突っ切ったと思ったら、急に宇宙から帰還した宇宙飛行士みたいに重力を感じておれは膝をついた。

「ここまでよく来たな小僧」

聞こえた声は、がさがさと雑音が混じっている。その声の主を見ようとしたが押さえつけられているかのように頭が上がらない。

まるで地球の重力が変わってしまったか、おれが瞬間移動で他の星に来たか……この後に及んでテレビアニメの影響を深く受けていると母さんの言葉に納得する。

だからって、おれには魔よけの鏡があるんだっ。

「これを喰らえっ」

どうだっ、そう言いながら必死で鏡を持つ手を上に掲げたが一向に身体は楽にならなかった。

何で？

「お、重っ、何で効かなくなっただんだ？」

「こいつが妖しじゃないからだ」

後ろから聞こえた猫又の声。

妖しじゃないって……だったら一体？

「そいつは神だ、孝之。鏡は今、用は無い。しまっとけ」

ぐいと肩を引かれたと思うとおれの前に猫又がずいっと出ていく。ちやりちやりと敷石が音を立てた。

にしても、この圧力は何だ？ これじゃあ真っ直ぐ立つことさえ困難だった。鏡が効かないんじゃないやおれにはどうしようもない。

前に立つ猫又がごによごによ言っているのを聞きつけて去年聞いたものに似ていると気付いた。

「……元柱固真、八隅八気、五陽五神、陽動二衝敵神、害気を攘払し、四柱神を鎮護し、五神開衢、悪鬼を逐い、奇動靈光四隅に衝徹し、元柱固具、安鎮を得んことを、慎みて五陽靈神に願ひ奉る……被いたまえ、清めたまえ、急急如律令……」

何を言ってるのか分からない。上から押し掛かる圧力はそれでも風が吹いているように揺らぐが無くなりはいしない。

「魔封じなど通じぬわ。妖怪ごときに鎮められるとも思っておるのか、この痴れ者め」

耳障りなかさついた声に胸が早鐘を打つ。

「孝之、懐中電灯持つてるだろ。それを俺さまが合い図したら真っ直ぐ向ける。いいな、しくじるなよ。それで、その後鏡をまた出せ」前を向いたまま猫又が早口で言う。そしておれの返事を聞くこともなく前進した。右手を刀のように振りかざした猫又の姿を目の端に捕えた。

去年見た時みたいな展開　そう思っていた。　だけど、相手は神って……。　神様なんだろう？　神様をやっつけていいのか？

っていつか、神様って強いんじゃないの？

「ぶっ殺してやるっ」

神様相手に畏れ多い言葉を吐きながら、猫又が跳び上がった気配がした。　相手が妖怪だろうが、人間だろうが。　ましてや神様だつて対応を変えない猫又は偉いのか、偉く無いのか？

ぶっ殺す相手の貴賤は問わない一本気な猫又の攻撃をおそらくかわしているだろう神様の気配が、動く空気の流れでおれにも分かる。「ちょこまか動きやがって。これで終わりにしてやる」

もうまんま悪役みたいな口ぶりの猫又の口からは短い息使いが聞こえる。　今までの攻撃が全てかわされたらしい。

さすが神様。

「おまえからはこれだけか。なら、今度はこちらから行くぞ」

金属を引つ搔いたみたいな耳障りな声で神様はひひひと笑う。

なんだか品の無い神様だ。しゅっと何かを通ったような気配の直ぐ後で「げぼつ」と口から何か吐き出される音がした。

おれじゃないんだからあれは。

「猫又？ だ、大丈夫か」

立てないおれは四つん這いのまま音のする方へ向かう。 敷いて

ある玉砂利が掌や膝に当たって結構痛い。

「来るなっ、じゃまだ、孝之つ。おまえの面倒まで見る暇なんてないっ」

即座に猫又の大声がする。

「じゃ、じゃまって」

「うるさいっ、立てないような糞はそこで大人しくしとけ」

また糞呼ばわりしやがって。 おれはじゃまかよ、そうなのかよ。

猫又のバカ野郎。

ちくしょうと思いつながら止まったおれのすぐ前にどおっつと塊がぶつけられるように落ちて来て、俺はそれが何かに気づいて凍りついた。

禍福をもたらすもの(前書き)

更新遅くてすみません > m () m <

禍福をもたらすもの

「お、おい。な、何寝てんだよ……」

暗いから。そう、だからそう見えるんだ。だけどおれの目は暗闇に慣れていて、はっきりと見えているんだと分かっている。

これが誰だか分かっているんだ。

目の前にぼる雑巾みたいに転がっているのは。

「猫又、おい返事しろ」

目を閉じたままの猫又の方へそのまま這いずって行こうとするが体が重くて急げない。ハイハイを覚えてたの赤ちゃんのようなへたくそな移動で。石の角が手足に刺さるが気にしてなんかいられない。

「猫又つ、しつかりしろ。猫又つてつ」

「我を誅するだどぬかす下郎め、死んでしまえ……いや、それだけじゃ勿体ないな。妖力をもらうとしよう。こいつは我が喰ってやる」

「か、神さま……?」

これが神様か? 喰うってなんだよ。妖力っておかしいだろ。

前から神様にしては下品だと思っていたが、さつきより酷いこの口ぶりはいったい何だ?

こんなのおかしいだろ、神様なら神通力じゃないか。

「……しろ……」

そこに風に混じって聞こえた声。何? 何をしろって? 混乱

するおれの頭に猫又の音が蘇る。そうだ、懐中電灯だ。気づかれないように上着のポケットを探る。握ったはいいがどこに向けるのかは聞いていない。

どうすりゃいいんだ、勝手に決めていいんだらうか?

止めだ、止め。どうせ考えたって分からんもんは分からん。

おれに猫又の考えなんて分かるかってえの。

どうしようかと迷った拳げ句、おれは懐中電灯の光を神様に向け

ることにした。親しんだ暗闇の中で放った光は、慣れない凶器のように目の前の神様に向かった。

やっぱり、無理でした。当然そうになると。だって神様に光当ててどうするんだ？ やった本人がそう思う前で「ぎゃあああ」という叫び声が聞こえた。

それはあまりにも動物じみっていて、神様が発した声だとは思えないものだった。っていうか、こいつが神様？

大きな黒い塊に見えていたのに、光を当ててみると実体は小さいのだと分かる。黒い繭のような物の中にいたのは動物に見える。

「……あなた、狸だよな」

黒い繭がゆらりと揺れた。

「無礼なっ、我を侮辱すると容赦しないぞ、ガキ」

蛸みたいな触手や、蜘蛛みたいなねばつくもの……なるほど変幻自在ってわけだ。

狸の神様……狐ならお稲荷さんとかあるけど。知らないだけでそうかもしれないが、おれにはそうは見えない。

っていうより、言動を見れば誰かに近いよな。

日本古来の神様は慈悲とご加護だけじゃない。福をもたらすこともあれば、厳しい試練を課すこともある。自然そのものが神と
いうものだ。

だとしても、おれの前にいるものに感じるのは畏れなんかじゃない。自分本位な悪意。

「あんたさ、神様っていうより妖し寄りじゃない？」

言った途端に繭の形が変わり、長い触手がびゅっと伸びておれの右足は掴まれ、あっけなく倒される。頭は打たなかったが、背中を地面に打ち付けて半端無い痛みにおれは呻いた。

「うっ」

「我が妖しだとっ」

割れた声がして、ぐおんっと繭の形が大きく揺らいた。

「我は……」

そう呟く言葉。だがそれは、もはや他者では無く、自分に向けられていた。『妖』、自身の口から出るたびに繭の形はそれ自体が生きもののように不規則に歪む。この空間がまるで寒天でできてでもいるかのよう。

「我は誰だ？ 我は……」

突起のように至るところから触手が飛び出しては引込む。めまぐるしく変わる繭の中で目をぎらつかせているのは神には見えなかった。繭の形が崩れ、空間が広がった瞬間に倒れていたはずの猫又の声がした。

「今だ、孝之」

それを合図に鞆の中で握っていた鏡を取り出し、おれは突き出す。さつきは何にも変化がなかったはずなのに、恐ろしいほどの光が目を焼く。目の前で強いフラッシュを焚かれたみたいに、おれは真っ白な世界に放り込まれた。

どれくらい経ったのか時間も分らない。気がついた時にはおれは鏡を持ったまま倒れていた。頬に石が当たって痛い。

「猫又？」

起き上がると鏡を鞆にしまって、辺りを見回す。暗い鎮守の森の中、ざくざくと誰かの足音がした。

「やったぞ、鞆の中にあるその物騒なものをあのご神木の祠に放り込んで来い」

「あ、うん」

祠にそうつと納めて扉を閉める。振り返って見上げるこの境内がなんだか透明度が増したみたいに感じた。

「上手くいったな、孝之」

肩に手を置いた猫又に抱き付きたくなるが、ぐつと堪える。なんとって今はエセでも女の子の格好だ。やられたと思ってたのにぴんぴんしてる……ってことは、おれって騙された？

「あれで良かったのか。一体やつは何だったんだろ？」

おれの問いに猫又がぱつと嫌そうな顔に変わる。言いたくない

のがあからさまで、一層聞きたくなる。

「おい、なんだか後ろめたいことがあるそうだな」

「ちっ」

やけに大きな猫又の舌打ちが聞える。　　っていうより、聞えるように舌打ちしたってのが正解か。

「言っけどやっちまったことを後からいろいろ言っつのは止めるよ、孝之」

「っーか、ろくでもない事みたいじゃないか」

ふんと鼻を鳴らすと猫又はもう一度舌打ちをした。

「あのさ、九十九神って知ってるよな」

「う、うん……」

なんか嫌な予感がする。

「さっき倒したあれさ……」

「うわあああつ、ちよつと待てつて」

猫又の話を聞くのが怖くなって遮ってしまった。　　もしかして、もしかして……神殺しをってしまった　　のか、おれたち？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6109y/>

猫又と俺 4

2011年12月21日23時52分発行